

『琉球漢字音訓辞典』の可能性について

西 岡 敏

一 はじめに

沖繩島南部、糸満市摩文仁の丘に沖繩戦で亡くなったすべての人々の名を刻んでいる「平和の礎(いしじ)」というモニユメントがある。この「礎」、通常ならば「イシズエ」という訓でよまれるところを、このモニユメントの場合には「イシジ」と訓ずる慣わしになっている。実は、「イシジ」は「沖繩語(ウチナーグチ)」で、和語の「イシズエ」に対応する語である。「礎」を沖繩的に「イシジ」と訓ずるところに、沖繩の地で起こった惨劇に対する人々の思いの深さが表現されていると思う。さて、本論で述べることは、この「礎(イシジ)」の部分と関係がある。いわゆる「共通語」(日本語)にお

いては、いま現在、私が書いているように「漢字かな交じり」で書くことが一般的である。そこでは「漢字」と「かな」が用いられ、「漢字」には音読みと訓読みがあり、たとえば、「書」は音読みが「シヨ」、訓読みが「カク」といった情報が『漢和辞典』に記載されている。それでは、「沖繩語」(琉球語⁽¹⁾)の場合において、「漢字」との関係はどのように捉えられるであろうか。

本土の文献に比べればかなり少ない量と言えるのかもしれないが、「沖繩語」で書かれた文献を見ると、沖繩独自の「音」や「訓」を見出すことができる。たとえば、現在の「沖繩語」では「書物」(本)に相当する語が「スムチ」(さらに古くは「シュムツィ」と発音される。ここから「書」=「ス」(ハ)「シュ」)、「物」=「ムチ」

(ハ)「ムツィ」と見なせるような沖縄独自の「音」を取り出すことができる。これらは、「書」||「シヨ」などの「和音」に対して、「琉音」と呼ぶことができる。⁽²⁾また、「礎」||「イシジ」のような沖縄独自の「訓」も少なからず見出すことができる。こうした沖縄的な「訓」は、「礎」||「イシズエ」などのような「和訓」に対して、「琉訓」と呼ぶことができる。⁽³⁾

沖縄における漢字の音や訓、すなわち「琉音」や「琉訓」は、本土における漢字の音と訓、すなわち「和音」や「和訓」とは異なる独自の部分を持っている。書き言葉という限られた世界でのことではあるが、このことをひとつの言語事実として記述することは重要であるにちがいない。また、そのような記述を総体的にまとめあげた『琉球漢字音訓辞典』なるものも必要であると思う。というのも、琉歌、狂歌、新民謡、芝居脚本など、現在かろうじて残っている「沖縄語」による創作が、「漢字かな交じり」で書かれており、その『辞典』によって、その「書く」行為に対する補助ひいては寄与ができると思えるからである。

まず、「琉音」や「琉訓」の実態を知るために、琉

球・沖縄における「沖縄語」が、人々によってどのように書かれてきたかを歴史的にふまえておく必要があるだろう。以下より、「沖縄語」の表現における「漢字」使用の変遷を見ていきたい。

二 金石文(碑文)・オモロにおける「漢字」使用

琉球に文字がもたらされたのは、一三世紀、日本の仏僧禅鑑が琉球に仏教をもたらしたときと考えられている。ただし、「沖縄語」が「書かれる」までにはもう少し時代を経ねばならなかった。「沖縄語」のまとまった文献は、一六世紀以降に現れる。金石文(碑文)と『おもろさうし』である。この時代、金石文(碑文)は、約半分は漢文であるが、残りは琉球文(散文)で書かれている。⁽⁴⁾『おもろさうし』は「沖縄語」による祭祀歌謡集(韻文)で、一五三一年、一六一三年、一六二三年の三回にわたって編纂され、全二二巻一五五四首のオモロ(『おもろさうし』の歌謡)から成り立っている。⁽⁵⁾

金石文(碑文)や『おもろさうし』の表記はほとんど「かな」であるが、ごく一部に「漢字」が使われている。

図1に『おもろさうし』(第四巻三〇、一連番号一八一)

からの例を掲げる。

このオモロでは、「一」「國」「又」「首里」「玉」「城」という「漢字」が使われている。⁽⁸⁾これら「漢字」をよむときの音声は、『おもろさうし』の時代における「琉音」「琉訓」という考え方で捉えることができよう。厳密には音声的に同一とはいえないが、「一」||「イチ」、は「琉音」でも「和音」でも同様、「國」||「クニ」、「又」||「マタ」、「玉」||「タマ」、は「琉訓」でも「和訓」でも同様ということになる。

「城」のみが「グスイク」と「琉訓」する、当時としては希有な例である。「和訓」ならば「シロ」となるであろう。「琉訓」と「和訓」が違ふ例として注目される。地名「首里」の扱いは難しい。これは、オモロの「かな」では「しより」と表記される語に当てられる漢字表

図1

一き(一)さすか(一)さかき(一)ふ(一)ほり(一)ふう(一)國(一)うちよせ(一)れ
又とよむ(一)さすか(一)さか
又首里(一)もり(一)く(一)す(一)く(一)ま(一)玉(一)も(一)り(一)城

記である。これを当時は「シュリ」と発音したという説がある。⁽⁹⁾「和音」であるならば「シュリ」であろうから、「シュリ」ならば、当時の段階では「琉音」と「和音」に差があることになる。しかしながら、「シュリ」が、韻文であるオモロの音数律に合わせるために「シュリ」となっているだけかもしれないので、「琉音」と「和音」に差があるとは容易に言いがたい。

ここでは、ひとつだけ、「城」||「グスイク」といった「和訓」とは異なる「琉訓」を挙げたが、こうした例は『おもろさうし』でも金石文(碑文)でも極めてまれなケースである。そもそも『おもろさうし』や金石文(碑文)では「漢字」はほとんど使用されず、使用されていても琉和共通のものがほとんどである。「城」以外に、「琉訓」と「和訓」が異なるものとしては、ほかに

たくしたらなつ(一)け(一)の(一)ふ(一)し

一き(一)こ(一)へ(一)さ(一)す(一)か(一)さ(一)か(一)き(一)み

ほ(一)こ(一)り(一)ふ(一)う(一)國(一)う(一)ち(一)よ(一)せ(一)れ

又(一)と(一)よ(一)む(一)さ(一)す(一)か(一)さ(一)か

又(一)首(一)里(一)も(一)り(一)く(一)す(一)く(一)ま(一)玉(一)も(一)り(一)城

「金」||「クガネイ」、「琉音」と「和音」が異なるものとしては、「天」||「テニ」が挙げられるかもしれない。これらは、本土側の「こがね(黄金)」や「てん(天)」と由来を同じくするので、「ぐすく(城)」における「琉訓」の独自性とは少し性格が異なるといえるのかもしれない。いずれにせよ、この時代、「沖繩語」に漢字を当てようという意識はきわめて低い。それだけに、その時代において独自の「琉音」「琉訓」を持つ「漢字」を指摘することは有意義と言えるのかもしれない。それらは、琉球文における独自の漢字使用の萌しとも言えるべきものだからである。⁽¹¹⁾

三 琉歌・組踊における「漢字」使用

こうした「かな」中心の「沖繩語」の表記は、一八世紀ごろになってくると少しばかり事情が違ってくる。薩摩支配の影響のなか、記録や消息(手紙)⁽¹²⁾には、漢文、変体漢文、和文がもっぱら使用された。そんななか、「沖繩語」による文芸も存在している。「琉歌」と呼ばれる短詩型歌謡と、「組踊」と呼ばれる沖繩の楽劇である。「琉歌」は、五七七七七という韻律の「和歌」に対して、

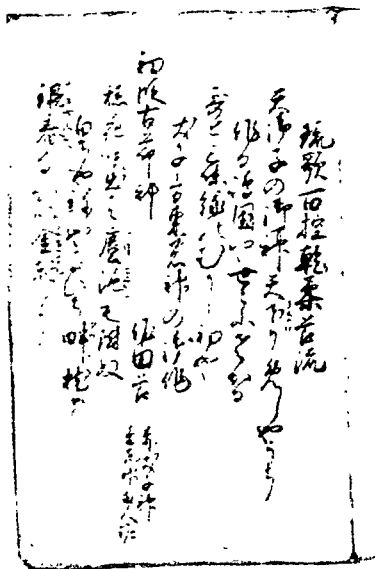
八八八六という韻律を持っている。「琉歌」は三線(サンシン)に載せて歌われるのが常であり、「琉歌集」がいくつか編まれている。⁽¹³⁾ また、「沖繩語」による楽劇、「組踊」には「組踊台本」が残っている。⁽¹⁴⁾ そして、それら「琉歌集」や「組踊台本」の表記は、「漢字かな交じり」の表記である。その表記からも分かるように、この時代、本格的に、「沖繩語」で書く文(琉球文)に漢字を当てようという意識が生まれってきたと言える。

その実例をひとつ見てみよう。『琉歌百控』(一七九五年成立)⁽¹⁵⁾という琉歌集における冒頭の影印と翻刻を図2として掲げる。

議論を単純化するために、「琉歌」の部分のみ、「天御子」「哥と」「穂花」「銀春」の各琉歌における漢字表記と発音の関係をとり上げて説明してゆきたい。琉球古典音楽として伝承されているこれらは、現在、首里言葉によって次のように発音されることが伝わっている。⁽¹⁶⁾

アマミクヌ ンチャン アマクダイ ミシヨチ
ツクル シマグニヤ ユユニ サカル

図2



ウタトウ サンシンヌ シカシ ハジマイヤ

イヌク ニアガリヌ カミノ ミサク

フバナ サチデイリバ チリ フィジン ツイカン

シラチャニヤ ナビチ アブシ マクラ

ナンジャ ウスナカイ クガニジク タテイテイ

漢字と発音の関係を対応させると、次のような等式が出来る。

一【天御子】 || アマミク

二【御神】 || インチャン

三【天下り】 || アマクダ【イ】

四【作】 || ツク【ル】

五【嶋国】 || シマグニ

六【世々】 || ユユ

琉歌百控乾柔節流

天御子の御神^{ミコノミカミ}天下り^{アマリ}めしやうち

作る嶋国や世々にさかる

哥と三味線のむかし初や

犬子音東の神の御作

初段古節部

作田節

赤犬子神

穂花咲出ば塵泥^{チリ}も附ぬ

音東神兩人作

白ちやねやなひち哇^ワ枕ら

銀春^{ギンハル}なかい金軸^{カネヂ}立て

(注16)

- 七【哥】 || ウタ
- 八【三味線】 || サンシン
- 九【初】 || ハジマイ
- 一〇【犬子】 || イヌク
- 一一【音東】 || ニアガリ
- 一二【神】 || カミ
- 一三【御作】 || ミサク
- 一四【穂花】 || フバナ
- 一五【咲出】 || サチデイ
- 一六【塵泥】 || チリフィジ
- 一七【附ぬ】 || ツイカ [ン]
- 一八【白ちやね】 || シラ [チャニ]
- 一九【畦】 || アブシ
- 二〇【枕ら】 || マク [ラ]
- 二一【銀春】 || ナンジャウス
- 二二【金軸】 || クガニジク
- 二三【立】 || タテイ [テイ]

語・熟語の多くは、「琉訓」として捉えることができ、「琉音」の例は少ない。「琉音」「琉訓」のうち、「和音」「和訓」と同じ訓を持つものもある。また、三母音化 (O→u, e→i) や口蓋化 (母音 [i] の前後で子音が変化する現象、「咲キsaki」→「咲チsachi」、「イカーika」→「イチャーicha」など) のような沖縄語における音変化が進んでいる「琉音」「琉訓」もある。さらには、「和訓」との対応関係がとりにくい「琉訓」もある。本論では、「琉音||和音」または「琉訓||和訓」の「漢字」を「グループA」、音対応により「琉音」と「和音」または「琉訓」と「和訓」が関係づけられる「漢字」を「グループB」、「琉音」と「和音」または「琉訓」と「和訓」の対応関係がとりづらく、互いに異なっている「漢字」を「グループC」と分類する。「琉訓」の例で言うならば、(A)「ウタ」「歌」のように和語と同じもの、(B)「イシズエ」に対する「イシジ」「礎」のように和語との音対応を考慮できるもの、(C)「グスィク」「城」(ハグすく)のように和語との音対応を考慮しにくいもの、に分けられる。⁽¹⁸⁾

以下では、「琉音」または「琉訓」のほか、一漢字ごとに「琉音」または「琉訓」を対応させたものを仮に付す。そこでは、上に述べた(A)(B)(C)の分類も加える。さらに、その語・熟語の「琉訓」または「琉音」についての(注記)を施す。

一【天御子】「琉訓」アマミク。【天】(A)アマ、【御】(A)ミ、【子】(B)ク。(注記)「あまみこ」が、三母音化によって「アマミク」に対応する。

二【御神】「琉訓」ンチャン。【御】(B)ン、【神】(B)チャン。(注記)「みかみ[mikami]」(御神)「が」口蓋化(イカ[ika]↓イチャ[icha])などを経て、「ンチャン[Nohan]」となる。語頭や語末において、共通語「ミ[mi]」と沖縄語「ン[N]」が音対応する例も、ほかに多い。語頭の例、共通語「ミナ(皆)」/沖縄語「ンナ」。語末の例、共通語「カガミ(鏡)」/沖縄語「カガン」。

三【天下り】「琉訓」アマクダ「イ」。【天】(A)アマ、【下り】(B)クダ「イ」。(注記)「くだり」の「リ」【三】におけるrが脱落して「イ【三】」になる。

四【作】(A)「琉訓」ツク「ル」。(注記)現在の首里言葉では「チュクユン」という。

五【嶋国】「琉訓」シマグニ。【嶋】(A)シマ、【国】(A)クニ。(注記)「琉訓」と「和訓」が共通。

六【世々】「琉訓」ユユ。【世】(B)ユ、【々】(A)踊り字。(注記)「よよ」が、三母音化によって「ユユ」に対応する。

七【哥】(A)「琉訓」ウタ。(注記)「琉訓」と「和訓」が共通。

八【三味線】「琉音」サンシン。【三】(A?)サ、【味】(B)ン、【線】(B)シン。(注記)「サンシン」が「三味線」に由来するか、「三線」に由来するかは議論の分かれるところである。⁽¹⁹⁾現在では【三線】と当てることの多い語。

九【初】(B)「琉訓」ハジマイ。(注記)「はじまり」【三】におけるrが脱落して「イ【三】」になる

一〇【犬子】「琉訓」イヌク。【犬】(A)イヌ、【子】(B)ク。(注記)人名で、琉歌や三線を作り出した神とされる。現在の首里言葉では「犬」は「イン」という。

一一【音東】「琉訓」ニアガリ。【音】(B)ニ、【東】

(C) アガリ。(注記) 人名で、原意は「声音がすばらしい人」とされる。「アガリ」を【東】とするのは当て字。「音」(ね)は、現在の首里言葉では「ニー」。

一二【神】(A)「琉訓」カミ。(注記)「琉訓」と「和訓」が共通。

一三【御作】「琉訓+琉音」ミサク。【御】(A)ミ、【作】(A)サク。(注記)「琉訓」と「和訓」、【琉音」と「和音」が共通。

一四【穂花】「琉訓」フバナ。【穂】(B)フ、【花】(A)ハナ。(注記)「ほばな」が、三母音化によって「フバナ」に対応する。「穂」(ほ)は、現在の首里言葉では「フー」。

一五【咲出】「琉訓」サチデイ「リバ」。

【咲】(B)サチ、【出】(B)デイ。(注記)「さきで(る)」「咲出」が、口蓋化(キ↓チ)と三母音化(デ↓デイ)によって「サチデイ」に対応する。

一六【塵泥】「琉訓」チリフィジ。【塵】(A)チリ、【泥】(C)フィジ。(注記)【塵】は「琉訓」と「和訓」が共通。「フィジ」は「泥」を意味するが、首里言葉では日常語としては用いない。

一七【附ぬ】(B)「琉訓」ツイカ「ン」。(注記)「つかぬ」が、「ツイカン」と対応する。ツイチュン(附く)の否定形。

一八【白ちやね】(A)「琉訓」シラ「チャニ」。(注記)【白種】と当てられるかもしれないが、「シラ」の部分だけを漢字に当てている。【白】「シラ」は、「琉訓」と「和訓」が共通。

一九【畦】(C)「琉訓」アブシ。(注記)「アブシ」は「畦」を意味する。

二〇【枕ら】(A)「琉訓」マク「ラ」。(注記)送り仮名の「ら」が付いている。「まくら」は琉歌では「マクラ」とよまれるが、首里言葉の日常語で「枕」を意味する語は「マックワ」である。

二一【銀春】「琉訓」ナンジャウス。【銀】(C)ナンジャ、【春】(A)ウス。(注記)書いた人の意識からすれば、「ナンジャ」は【銀】に対する「琉訓」であるが、実質上は、【南嶺】(なんりょう)に対する「琉音」であるということが出来る。「白」は、現在の首里言葉では「ウーシ」という。

二二【金軸】「琉訓+琉音」クガニジク。【金】(B)

クガニ、【軸】(A)ジク。(注記)「こがね」が、三母音化によって「クガニ」と対応する。『おもしろさうし』でも「こがね」は【金】と当てられる(一連番号一四六六など)。

【軸】は、「琉音」と「和音」が共通。

二三【立】(B)「琉訓」タティ「ティ」。(注記)「たてて」が、三母音化によって「タティティ」と対応する。

以上、『琉歌百控』の冒頭部のみから「漢字」を抽出し、「琉音」「琉訓」を提示したのであるが、この僅かな部分から、いくつかの問題点が浮かび上がってくる。

たとえば、【神】という一漢字には、「チャン」(二)

という訓みと「カミ」(一一)という訓みの二通りの「琉訓」が取り出せる。しかしながら、「沖縄語」において、「神」を意味する語は「カミ」であって、「チャン」という語形はない。「チャン」は、あくまで「御神」の「ンチャン」のなかでのみ現われる音形である。「チャン」を「神」を意味する形態素として取り出すことも可能であるが、神Ⅱ「チャン」と訓まれる熟語が他にもないとするれば、「琉訓」として認定することに、果たしてどれだけ意味があるのか疑問になってくる。【三味線】

Ⅱサンシン(八)の【三味】の部分も、【三】Ⅱサ、【味】Ⅱン、の例が他にもなければ、【三】Ⅱサ/【味】Ⅱン、と分解することに大した意味があるとは思われない。

【子】という一漢字にも、【神】と似た問題がある。上例では【子】は「ク」(一、一〇)という「琉訓」を取り出しているけれども、「沖縄語」で「子」を意味する語は「ツクワ」であって、「ク」ではない。ただし、【子】の場合、【子】Ⅱクとなるものが、上例の【天御子】Ⅱアマミク(一)、【犬子】Ⅱイヌク(一〇)、というように複数個ある。このような場合には、「琉訓」として認定することに何らかの意味を見出せるかもしれない。独立した形として用いられる「琉訓」、別の語に付属した形で用いられる「琉訓」、といった使い分けも視野に入れる必要があるだろう。

【東】を「アガリ」と訓ませていること(一一)は、「沖縄語」で方角の「東」のことを「アガリ」(太陽の「上がる辺」ということを反映しており、「琉訓」としては注目される例である。しかしながら、この【音東】における【東】が方角の「東」ということを意味してい

るかは非常にあやしい。【音東】は、人名なので何とも
言えないが、【音東】の【東】は、あくまで当て字で、
「音」が「揚がる」、すなわち、「声音がすばらしい」が
原意とみるのがよいだろう。『おもろさうし』（第八巻）
でも、「おもろねあがり」という者が美声の持ち主とし
て歌われている。

また、「送りがな」も、とりわけ実際に琉球文を「書
く」場面においては問題となることが予想される。上例
では、【初】（九）には全く「送りがな」なしで「ハジマ
イ」と訓ませている。【立】（二三）は【立てて】ではな
く【立て】で「タティティ」、【附】（二七）は【附かぬ】
ではなく【附ぬ】で「ツイカン」と訓ませている。【枕】
（二〇）は、なぜか【枕】ではなく【枕ら】で「マクラ」
である。

そもそも、ある語に漢字をあてるといふことは、もと
もとの語が持っていた意味の広がりや微妙なニュアンスを
覆い隠してしまうという欠点がある。⁽²¹⁾たとえば、「かみなり」に【雷】と当ててしまうことで「神が鳴る」とい
う原意を見えにくくしてしまう。和語に漢字を当てることは、その意味の特定化には寄与するが、和語がも

っている意味の広がりや圧殺してしまうのである。⁽²²⁾

そうした一般的に留意すべきことにも加えて、『琉歌
百控』における漢字には、かなり凝ったあて字が数多く
見られる。「二三月」（うりずん）「ウリズイン」、「藻列」
（睦れ）「ムツイリ」、「存命て」（長らえて）「ナガライテ
イ」といった類である。こういった例をいかにして『辞
典』に取り込むか、どこまで一般的な琉球文の表記とし
て許容するかは、これから議論すべきところといえる。

琉歌や組踊が盛んに作られたこの時代に、琉球文（韻
文に限るが）の「漢字かな交じり表記」が確立したとい
って良いだろう。この時代以降、琉球文は「漢字かな交
じり」で書かれることが一般的になり、その流れは現在
まで続いている。⁽²³⁾

四 近代以降における琉球文の「漢字」使用

近代以降、「沖繩語」はどのように表記されているだ
ろうか。ここでは、琉歌（近代琉歌）、狂歌、沖繩民謡、
沖繩芝居脚本（戯曲）、創作組踊、方言詩、琉訳讚美歌、
民話資料、沖繩ことわざ集、方言ニュース、島言葉大会
パンフレット、島言葉同人誌、などのような琉球文の資

料が挙げられる⁽²⁴⁾。

以上挙げたものの数多くは、「漢字かな交じり表記」によって書かれている。その「かな」においては、最近では、琉球文において伝統的に用いられてきた「沖繩の歴史的仮名遣い」が崩れ、できるだけ音に合わせた「かな表記」を志向するようになってきている。すなわち、従来ならば、「の」と表記して「ヌロ」、「て」と表記して「ティロ」、「と」と表記して「トゥロ」などとよませていたところが、多く「ぬ」「てい」「とぅ」などという表記になってきているのである。

最後に、二〇〇〇年(平成十二年)六月二三日における『沖繩タイムス』夕刊、「ハワイ琉歌会」に上げられ



図3

- | | |
|--------------|--------------|
| 心書き立ちゆる春ぬ使い | 海やな々とあまた船止まて |
| (堀田忠孝) | 我身人船共に世界ゆゆ巡ら |
| 十五や二十年や昔船ぬ船文 | (喜屋武剛) |
| あどて 蝸牛ぬ子ぬ逢引 | 移民百年ぬ僅しぬ統ち 見 |
| ちたほり | 物前ち物や命ぬ染 |
| (アリン)信子 | (仲摩弘子) |
| 番右衛門や夜て実や大ま甘 | コーヒーショップに入り独 |
| さ 沖繩居て食なる味ぬ淡 | り身や過ち 人ゆ眺み眺み |
| (比嘉秋子) | 肝ぬ休み (浅井勉) |
| 風や 吾が肌ゆ撫でて山に | 海や静々と風や涼々と 風 |
| 登る (比嘉静江) | 三味ぬ舞さんや人間国至に |
| りぬ平和世ぬ眺み酒ち | ハワイまで響くぬぬ誇い |
| (喜屋武下三) | (比嘉武信) |
| 節造が九庭や八重桜咲かち | |

た琉歌(図3)を例に、「琉音」と「琉訓」を求める作業を試しに行ってみた。

紙面の制約上、最初の二首のみに解説を加える。「漢字」の「よみ」には、今現在の首里言葉の発音を採用する。いくつかには、論者の見識不足により、どうよむか不明のものがあ、疑問符を付してある。また、「和音」や「和訓」を持った「漢字」を使用していると思われるものもある。現代生活の中で必要な語彙は「共通語」から移入され、それが琉歌の中でも使用されるわけである(※を付した)。仮に付した(A)(B)(C)の分類は、前述と同じである。「海風」(A)(B)は、「海」が(A)、「風」が(B)に属することを示す。

- 【女】(B)「琉訓」ウィナグ(注記)「をなご」【女子】と関係ある語と思われる。
- 【子】(B)「琉訓」グワ(注記)クワの連濁。「こら」【子等】と関係ある語と思われる。
- 【呉】(B)「琉訓」クイ「テル」(注記)「くれてある」【呉れて有る】に対応。
- 【色紙】※「和音」シキシ。
- 【前】(B)「琉訓」メー(注記)「まえ」に対応。「メー」は日

常の首里言葉。琉歌では短音化され「メ」となる。琉歌の短音化については、以下同様。

【筆】(B)「琉訓」フディ(注記)「ふで」に対応。

【二十年】(A)(A)(B)?「琉音」ニジューニン?／「琉訓」ハタチ? (注記)「にじゅうねん」か「はたち」かに対応。

【振り】(B)「琉訓」ブイ(注記)「ぶり」に対応。

【意儘】(A)(A)「琉訓」イママ? (注記)「和訓」と共通か?。

【涼だ涼だ】(C)(C)「琉訓」シ(ダ)シ(ダ) (注記)涼しいは、今現在の首里言葉で「シダサン」という。

【吹】(B)「琉訓」フ「チュル」(注記)「ふきよる」【吹き居る】に対応。「送り仮名」以外は「和訓」と共通。

【夏】(B)「琉訓」ナチ(注記)「なつ」に対応。

【海】(A)「琉訓」ウミ(注記)「和訓」と共通。

【海風】(A)(B)「琉訓」ウミカジ(注記)「うみかぜ」に対応。

【吾】(B)「琉訓」ワー(注記)「和訓」ワ。日常の首里言葉では長母音。琉歌では短音化され「ワ」となる。

【肌】(A)「琉訓」ハダ(注記)「和訓」と共通。

【撫】(B)「琉訓」ナ「ディテイ」(注記)「なでて」に対応。「送り仮名」以外は「和訓」と共通。

【山】(A)「琉訓」ヤマ(注記)「和訓」と共通。

【登】(B)「琉訓」ヌブ「ル」(注記)「のぼる」に対応。

【節】(B)「琉音」シチ……

こうした作業を積み重ね、「漢字」と「音訓」の関係を記述したものを、数多く集積し、整理すれば、本題に提示した『琉球漢字音訓辞典』なるものも可能となるのではないだろうか。⁽²⁾「沖繩語」をはじめとする島言葉(琉球列島における諸方言)の危機が叫ばれるいま、主体的にかつ自発的に島言葉を使って何かを書こうとする人たちに、こういう島言葉について、先人たちはこう漢字で当てていたという資料を『辞典』という形で提供できれば、その「書く」行為への手助けができるのではないかと考えるのである。

(1) 本論では、「沖繩語」(琉球語)を首里方言(沖繩中南部方言に属する)を軸として考える。琉球列島の言語は、シマ(集落)によって言葉が変わると言われるほど、バリエーションに富み、各集落の言葉は「シマクトゥバ(島言葉)」ないしは「シマグチ(島口)」などと呼ばれている。そんななかで、「首里言葉(首里方言)」を軸にして話を展開することには、問題が残るのであるが、議論を円滑に展開する上での措置としてご了承願いたい。本論における

「首里言葉」の発音については、国立国語研究所(一九六三)『沖繩語辞典』(大蔵省印刷局)を参考にしている。縦書きにおける読みやすさを考え、原典のローマ字表記ではなく、カタカナ表記に変換して提示する。

- (2) 「琉球漢字音」と言ってもよい。しかしながら、こうした「音」の取り出しには問題がある。沖繩には「書物」という語形全体が移入されたのであって、当時の段階において、「書」と「物」に分解し、「書」|| シュ(ヴス)、「物」|| ムツイ(ヴムチ)として「琉音」を取り出す考え方があったとは思われない。また、『字書』として「漢字」を一字ずつ取り出し、それに「琉音」を注記するということもなかったようである。さらに、日常の「沖繩語」では「シュ」「ス」のような一拍の自立語は許されず、必ず「シュー」「スー」と二拍になることも留意すべき点である。(そのほか、もとの「音」のアクセントが、いかに「琉音」に反映されているかという問題もある。)
- (3) 「琉音」や「琉訓」といった用語は、沖繩独自の構造を持った短詩型歌謡を、本土の「和歌」に対して、「琉歌」と呼ぶことに示唆を得ている。
- (4) 「沖繩語」が「書かれる」経緯については、伊波普猷による次の文章を参照。伊波普猷(一九七五)『一九二七』「日本文学の傍系としての琉球文学」『伊波普猷全集第9巻』(平凡社)三六〜三九頁、(一九七五)『一九四〇』「方言」と国語生活 国語の南島への宏通『同第8巻』六二三〜六二六頁、(一九七四)『一九三四』「南島方言史攷」『同

第4巻』一一〜一二頁、(一九七四)『一九四七』「沖繩歴史物語」『同第2巻』四六七頁。なお、「沖繩語」で書かれた文については、伊波普猷が「琉球文」という言い方をしており、本論も必要に応じてその言い方を使用する。東恩納千鶴子(一九七三)『琉球における仮名文字の研究』(球陽堂書房)では、金石文(碑文)、『おもしろさうし』、王府の辞令書などにおける表記の考察がなされている。

- (5) 伊波普猷(一九七五)『一九二七』「日本文学の傍系としての琉球文学」『伊波普猷全集第9巻』(平凡社)三七頁、(一九七五)『一九三二』「古琉球散文の一例」『同第9巻』沖繩県教育委員会(一九八五)『金石文 ―歴史資料調査報告V―』(沖繩県文化財調査報告書第六十九集)などを参照。

- (6) オモロの「沖繩語」の特徴について少し述べておきたい。「沖繩語」では、共通語のエ段に相当する音がイ段で発音され、オ段に相当する音がウ段で発音される(三母音化)傾向がある。『おもしろさうし』では、オ段はすでにみなウ段化しており、エ段は部分的にイ段化しているものの、完全にはイ段化していないことが言われている。高橋俊三(一九九一)『おもしろさうしの国語学的研究』(武蔵野書院)などを参照。

- (7) 仲原善忠・外間守善(一九六五)『校本おもしろさうし』(角川書店)による。

- (8) 「一」「又」は歌唱法を示す記号であるので、ここでの議論では省いてもよかったかもしれない。

- (9) レオン・セラフィム(一九七七)「首里三殿内の君々」『青い海 六四号』(青い海出版社)五二頁。
- (10) 『おもしろさうし』と時代を同じくする『日葡辞書』(一六〇三年刊行)のように書くならばXuniとなる。『日葡辞書』には、首尾=Xuniシユビ、郷里=Xuniケヤカリ、Qoniケヤカリ、とある。土井忠生・森田武・長南実(一九八〇)『邦訳 日葡辞書』(岩波書店)参照。
- (11) 外間守善・西郷信綱(一九七二)『おもしろさうし』日本思想大系一八(岩波書店)、外間守善(二〇〇〇)『おもしろさうし』(上)(岩波文庫)などにおいては、意味を読者に分かりやすく伝えるために、オモロに「当て漢字」が施されている。これらの「当て漢字」も、本論の主旨に役立つ一つの参考材料といえよう。
- (12) 琉球における漢文の訓読は、一六三二年、薩摩の儒学者泊如竹が伝えたと言われている。その訓読は和訓によって行われていたらしい。真境名安興(一九九三)「一九三二」『沖縄教育史要』第三編第一章第一節「真境名安興全集第二卷」(琉球新報社)三六七頁参照。
- (13) 外間守善・仲程昌徳(一九八〇)『南島歌謡大成Ⅱ沖繩編下』(角川書店)などを参照。
- (14) 伊波普猷(一九七五「一九二九」)「校註 琉球戯曲集」『伊波普猷全集第3巻』(平凡社)、芸能史研究会(一九七五)『日本庶民文化史料集成 第一巻 南島芸能』(三一書房)などを参照。
- (15) 影印(琉球大学附属図書館蔵本)は沖縄県立博物館

(一九八八)『特別展「三線名器一〇〇挺展」』四三頁から転載し、翻刻は外間守善・仲程昌徳(一九八〇)『南島歌謡大成Ⅱ沖繩編下』(角川書店)三一頁を参照した。

(16) このあと次頁に「計てつき余雪の真米」(ハカティツイチアマス ユチヌ マグミ)という琉歌の下旬が続く。

(17) 島袋盛敏・翁長俊郎(一九六八)『標音評釈 琉歌全集』(武蔵野書院)を参照した。ここでは、首里言葉による琉歌三〇〇首の発音が、カナ表記とローマ字表記(音韻表記)の両方の方法によってある程度正確に記されている。琉球列島の言語には、地域差があるだけでなく、時代差があることに注意されたい。

(18) 図で例示すると次のようになる。

グループA グループB グループC

【軸】【和音】ジク
【琉音】ジク

【線】【和音】セン
【琉音】セン

【歌】【和訓】ウタ
【琉訓】ウタ

【穂】【和訓】ホ
【琉訓】ホ

【花】【和訓】ハナ
【琉訓】ハナ

【礎】【和訓】イシズメ
【琉訓】イシジ

【東】【和訓】アガリ
【琉訓】アガリ

【海】【和訓】ウミ
【琉訓】ウミ

【風】【和訓】カゼ
【琉訓】カジ

【城】【和訓】シロ
【琉訓】グシク(グスイ)

【畦】【和訓】アゼ
【琉訓】アブシ

ただし、こうした分類は、あくまで「和音」「和訓」との対比のうえでの分類であって、「琉音」「琉訓」のみの閉じた体系を論じるときには不必要であるかもしれない。

(19) 池宮正治(一九九七)『続・沖縄ことばの散歩道』(ひるぎ社)七九〜八六頁参照。

(20) 沖繩古語大辞典編集委員会(一九九五)『沖繩古語大辞典』(角川書店) 五一七頁参照。

(21) 大野晋(一九七四)『日本語をさかのぼる』(岩波新書) 一七〇頁参照。「沖繩語」であれば、たとえば「チュラサン」が「きよらさ」(清らさ)に由来するのにもかかわらず、「美らさん」と当てられてしまうことが想起される。

(22) 沖繩の姓名に漢字が当てられ、どのように変遷させられて(させて)いくかについては、バクティアル・アラム(一九九九)3沖繩姓名の変遷「沖繩文化の基底と普遍性——東南アジアとの対比において——」『沖繩文化研究二五』(法政大学沖繩文化研究所)を参照。

(23) 近代以降、意味が容易にとりにくい「古語」などを書き写した資料などには「仮名表記」のみのものも数多く見られる。また、言語学者や方言学者による琉球語諸方言の音声(音韻)表記が登場してくる。

(24) 近代以降の「沖繩語」による創作については、外間守善(一九八一)「第一章 沖繩語の表現」『日本語の世界9 沖繩の言葉』(中央公論社)を参照。各ジャンルの解説を簡単におこそう。「琉歌」や「狂歌」は、おもに沖繩の新聞紙上に掲載されてきているが、「琉歌集」「狂歌集」も存在する。「沖繩民謡」には、テープやCDの歌詞カードがあり、沖繩民謡を集めた「歌詞集」も多数ある。「沖繩芝居脚本(戯曲)」は、公演パンフレットに台詞が採録されることがあるし、「戯曲集」として本にしてまとめ

られたものもある。「創作組踊」は、これからの沖繩の伝統芸能を再生させるためにも望まれているものであるが、文字になっているものがある。「方言詩」は、石川正通(一九七七—一九八二)のものがある。また、外間守善(一九八一)『前掲書』第一章によれば、沖繩の作家たちも、小説の中で「沖繩語」を活用しており、「沖繩語」をどう表記するかということも問題となっている。

「民話資料」は、沖繩各地のものも数多く集まり、それぞれ「民話集」として編まれている。採録されている民話はいずれも島言葉(地元集落の言葉)によるものと、部分的に島言葉でそれ以外は共通語によるものとに分かれる。「沖繩ことわざ集」についても、いくつか本が出されている。

「方言ニュース」は、ラジオ沖繩(ROK)の放送番組(五分間)であるが、文字化されてまとめられたものがある。「島言葉大会パンフレット」にも、島言葉でスピーチする発表者の原稿が採録されることがある。「島言葉同人誌」は、カルチャースクールや地方公民館の活動で編まれるものである。

(25) 外間守善(一九九五)『南島の叙情——琉歌』(中公文庫) 三六二—三七〇頁参照。

(26) これらの表記においては、「沖繩の歴史的仮名遣い」によれば「の」となるところが、発音通り「ぬ」となっている。ただし、「ティ」「トゥ」などは「て」「と」と「沖繩の歴史的仮名遣い」を守っている。

(27) 「沖繩語」を転写した中国語資料やハングル資料なども「琉音」「琉訓」を探るときの手がかりとなる。また、次のような形でも『琉球漢字音訓辞典』を補うことはできないだろうか。たとえば、『沖繩語辞典』(「首里方言辞典」)における「標準語引き索引」の一部と「漢和辞典」における「音訓索引」の一部をマッチングさせ、「漢字」に「首里方言」を対応させるのである。ただし、そうした

「方言辞典」に挙がっている言葉には、漢字を当てにくい語も多いので、かなり限られた範囲にしか適用できないのかもしれない。なお、くり返し言うように、琉球列島の言語は極めてバリエーションに富んでいる。奄美、沖繩、宮古、八重山といった各地域の言語を含めた『琉球漢字音訓辞典』を、さらに広くは見ておく必要がある。

(一橋大学講師)